松波むかし語り　ここに住み続けて　その56

今回のお客様

「天使の隠れ家」のオーナー

板倉（いたくら）　章治（しょうじ）さん 75歳　4丁目

“松波の最高のロケーションを活かした、おしゃれなまちづくりを考えてほしいですね！“

「私はここの掃除人夫でしてね」などとおっしゃる板倉さんは、たしかにシェフではなさそうですが、この松波の最高地点にあるレストラン「天使の隠れ家」の家主です。なぜフランス料理だったんですか？　そうお聞きすると、「大学でフランス文学を専攻していたこともあるのでしょうが、フランスワインのコレクションを持っていたことが直接のきっかけでしょうか」。“天使の隠れ家”とは凝ったネーミングですね？　「私の友人に、これからの社会の流れがどうなるか研究している、トレンド研究家がおりましてね。彼が、『店を開くならネーミングが大事だ。一度聞いたら忘れない名前がいい』と言うのです。そこで 17 年前、店を開くとき、ブームであった『天使』と『隠れ家』とをくっつけてみたのです」。そういえば、『男の隠れ家』という雑誌が出たのも 1997 年でしたね。

板倉さんは 1940(昭和 15)年、市の中心街、いまのキボール(昔の扇屋と言ったほうがわかりやすいでしょうか)の向かいの勉強堂、板倉家の次男として生まれました。私など、「メガネと言えば勉強堂」というイメージが強いのですが、メガネばかりでなく、時計や光学機器などを扱ってきた千葉の老舗です。もともと蘇我で 300 年続く回船問屋だったのが板倉家の原点で、明治以降、船の需要が落ちたことから、メガネを扱う店に転じたそうです。「30 年社長を務めて 55 歳でリタイヤして、さて次は何をしようと考えたとき、物販の世界は厳しそうだから製造と販売がセットになったレストランにしたんです」。名刺には“ビストラン”とあります。「居酒屋を意味するビストロほど気軽じゃないけれど、正装して食事をするレストランほど堅苦しくない、そんなお店をめざしたんです」。聞けばこの言葉、板倉さんの造語だそうですが、その言の通り、昼間は女性が中心で、最近ではお寺の法事のあと、座敷より椅子席がいいという利用客なども目立つそうです。

「ここはオペラ歌手のコンサートをはじめ、ウクレレやハワイアンといった音楽関係の方々も多いのですが、ヨーロッパでは、コンサートのあとレストランに流れてからが楽しみなんです。でも千葉では、例えば市の文化会館の周りにそんなお店は見当たらないでしょう。街の真ん中に人々が楽しく集える場が必要なんですね。そう考えると松波は、千葉公園や医療センター、大学や図書館にも囲まれていて、しかも交通の便がいい。ロケーションとしては最高だというところを活かして、おしゃれなまちづくりを長期的視点で提案してもらいたいですね」。板倉さんは以前、商工会議所の常議員の時、起伏の少ない千葉の地の利を活かして“自転車で走れるまちづくり”を提案したこともあるといいます。「高齢者が安心して自転車に乗れるまちをめざせば、健康やボケ防止にも役に立ちます」。アイデアいっぱいの 75 歳です。(竹)